

ともしび

五月号

「覚えて生きる」(一)

櫟

(首都圏教化教導) 暁

ただ今、御紹介に預かりました櫟でございます。今年また、この御縁をいただいて、お話を申し上げることになりました。

私は、曾我量深先生の教えをいただきました。真宗門徒に、門徒の一員に加えていただいた者でございます。そのことにつきましては一昨年、お話し上げしましたので、今回は繰り返しません。もし曾我量深先生にお会いする事がなかったならば、私はとつとつに昔に自殺して終わっていたらと思うます。旧軍隊から復員して帰ってまいりまして、これからどう生きていくのかということが、全くわからなくなりました。絶望のどん底に落ち込みました時に、藤代聆磨先生のお導きで曾我先生にお目にかかりまして、初めて浄土真宗という教えを、聞かせていただく事が出来たわけでございます。それは、一九四五年(昭和二十年)のことでございます。今から四十四年程前のことでございます。で、曾我先生が一九七一年(昭和四十六年)にお亡くなりになりました。その十三回忌の法要が一九八三年(昭和五十八年)につとまりまして、その年の六月十九日に、この高倉会館で日曜講演が鸞音忌としてつとまりました。それは今から六年前の事でございます。で、その折に新田(前)館長さんが大変御努力をされて、曾我先生のお言葉に、珠玉のようなお言葉に、この、藤代先生の解説を付した、「鸞音抄」という小さな書物が出版された訳でございます。で、その小冊子を、私いつも机の上に置いて、折ある毎に何回か繰り返し読んで読んでおる訳であります。その中で、最もやさしく、曾我先生がお示し下さったお言葉があるわけです。

新潟県(越後)の長岡で、一人おばあさんが寝たきりでいらっしやる。そのおばあさんの為に筆をとられたものでございます。

一、仏様とはどんな人であるか。

われは南無阿弥陀佛であると名告っておいでになります。

二、仏様はどこにいなさるか。

仏様を念ずる人の前においでになります。

三、仏様を念ずるにはどのような方法がありますか。

仏たすけましますと念じます。誰でも、どこでも、いつでも、たやすく仏を念ずる事ができます。

昭和三十九年九月十三日 曾我量深

と。このお言葉は、最もやさしく浄土真宗を願してくださったお言葉だと、私はいただいております。その後、曾我先生が渡米されまして、ロサンゼルス^{ロサンゼルス}の別院で御輪番の奥様の御要望で、同じような言葉を書き残されておるわけですが、そのお言葉の第三のところ、深く詳しく書かれておるわけでございます。第一と第二は同じですので、第三の所だけを読んでみますと、

南無阿弥陀佛と一念疑いなく自力の計らいを捨てて静かな心をもって、佛願わくばこの罪深き私を助けまじと念するのであります。これは誰でも、どこにいても、いつでも、悲しい場合でも、うれしい場合でも、たやすく佛を念ずる事が出来るのである。この念が現前する時、いかなる煩惱妄念が襲い来たっても内心の平和は絶対に破れません。これを真の救済と申します。

と、こう書かれておるわけでございます。この長岡の寝たきりのおばあさまに対して書かれた場合は、

仏様を念ずるにはどのような方法がありますか。
佛たすけまじと念じます。

と、こう簡単に書かれておる。ところがロサンゼルス^{ロサンゼルス}の場合は非常に深くまた、広く詳しく書かれておる訳でございます。

南無阿弥陀佛と一念疑いなく自力の計らいを捨てて、静かな心をもって、佛願わくばこの罪深き私を助けまじと念するのであります。これは誰でも、どこにいても、いつでも、悲しい場合でも、うれしい場合でも、たやすく佛を念ずる事ができるのである。この念が現前する時、いかなる煩惱妄念が襲い来たっても内心の平和は絶対に破れません。これを真の救済と申します。

非常に私はこのお言葉をありがたくいただいております。で、この中で、

『佛願わくばこの罪深き私を助けまじと念するのであります。』

というこの一句は、大変深い意味がありまして、私達が自分の分別で、自分の考えで、如来にお助け下さいとこう請求するのではなくて、人間の心で如

来に請求するのではなくて、これは、法蔵菩薩が、南無阿弥陀佛を我が名として運び取ってる。そして全ての人に、この我が名を称えさせたいと。全ての人に、南無阿弥陀佛と我が名を称えさせたい。そして名の用らきで、南無阿弥陀佛という言葉の用らきで、全ての人を救いたいという、目覚めさせたという、本願のお心。これを難しい言葉で申しますと、『如来選択の願心』(聖典二〇頁)です。教行信証(信巻別序)に出てまいります難しい言葉で申しますと、『如来選択の願心』です。それを、やさしく申しましたら『本願のお心』であります。その『本願のお心』に、響き合うた、成程そうでございます、とこう響き合うた、その響き合うたところをこのように表現しておられるわけです。決してこの、人間の心でどうか仏様、私を助けて下さいという、いわゆる一般の宗教の、一般信仰のような表現ではないのでありまして、これは如来の願心に響き合うた表現であります。

それで、その如来の願心に響き合うことによって、その響き合うこと、そのことが、我々の真のおたすけなのです。それでそのおたすけの内容を一言で表わしたらどうなるかと、私は考えさせていただきました、「覚めて生きる」という言葉を見出した訳でございます。私は講演の題をつけるのが非常に下手でございます。各地に御招待いただいて、お話をさせてもらいますが、題だけはどうか堪忍して下さい。題をつけますと、題にとらわれてしまつて話が、どうも固くなってしましますので題はこらえて下さいと申し上げるのですけれど、なかなかこらえていただけません。何か一つ題を、とおっしゃるもので最近、この「覚めて生きる」という題で、だいたいどこでもお話させていただいております。

二

この「覚める」という事、この「覚」の字は、自覚の覚の字です。自覚の覚だけれども、同じ自覚という言葉を使いましても、いわゆるこのヨーロッパの近代の自我の自覚という事も自覚という言葉を使いますけれども、ここで「覚める」と申しますのは、これは佛の本願力によって、目覚める、という。私の迷いの深さ、愚かさに気がつかせてもらって、真にたのむべきは本

願であると目覚める。私の知性とか感性とかというものじゃなくて、真にたのむべきものは如来の本願であるということ、一言で言ったら南無阿弥陀佛だという事に「目覚める」、「覚める」。眠って夢見ておった者が覚めた。俗な例えで申しますと、夢の中で財布を拾った。これは、非常に俗なたとえでございます。お許しいただきたいと思えます。覚めてみたら、ああ夢だった。勿論そこには何も無い。だけどもあることはひとつある。それは、自分が夢を見ていたということが一つある。そうでしょう。何もないけれど自分が夢を見ていたということだけはあります。その夢を見ていたということが、その夢から覚めて初めてこの夢を見ていたということがわかる。仏教の譬えというのはいろいろございまして、まあ夢の中で夢が覚めたという譬えもあります。

夢の中で夢を見てその夢が覚めたという夢を見ている場合があるというようなことが、どこかお経に書いてありました。私、記憶力がよくないのでどこに書いてありましたか忘れてしまいましたが、夢の中で夢が覚めたというような覚め方でない、本当に覚める。本当に覚める。その本当に覚めるというのはね、法によって覚める。ダールマ。今、ダンマ、ダンマと言われる方が多くなりましたね。これは流行でしょう。仏教に流行という事はないでしょうけれども。ま、昔、私が習った頃は、ダールマと言っていた。ところが最近ではダンマ、ダンマとこう言う方が多くなりました。あのテレビの「心の時代」などに出て来られる大学の先生もダンマ、と言われる先生がおられます。どちらを言われても要は同じ法(道理)と言うことです。法即ち佛によって明らかにされた法(道理)に照らされて、私が本当に目が覚める。夢から覚める。こういうことが、「覚める」ということです。自覚というのはいわゆる現代の常識的な自覚とか、もうひとつ申しますと、ヨーロッパ近代の自我の自覚というようなことではないのでございまして、我思う故に我ありとかというそういう自覚ではなくて、佛によって照らされて、佛のさとられた法に照らされて、佛の教えによってその法(道理)をなす程と領かせていただいて、自分は長い間夢を見ていたものだという事に気が付かせてもらおうということです。そこに新しい生き方が始まる。その新しい生き方が始まるという事が大事なことで、私には、一九四五年(昭和二十年)に曾我先生にお会いして、初めて知らせていただいたわけですから四

十数年間、たくさんの方のお導きをいただきました。浄土真宗という教えに会わせていただいたという事は、何物にもかえ難い有難いことであります。また、この教えに会わせていただかねば、生きることの本当の意味がわからないのです。単にこの生理的に生きておる。或いはまた、脊椎動物の一種類としての人間の命を続けておるという事になってしまふのです。本当に言葉のわかる人間として、目覚めて生きていくこと自体が、何よりの深い喜びであるという世界を見い出させていただく。それは、見い出すというと偉そうに聞こえますので、その法の力で感じとらせていただく。こういうことを、「覚める」というのでございます。

三

それで、そのことが、非常に具体的に表現されておる譬喩があります。仏教の表現の一方法としての譬喩は、譬えなのですが、単なる譬えじゃありません。本当に自分自身のこととしていただける譬えが教えの内容となってくる。それは例えばどういう事かといえますとね、教行信証の信の巻の中に、『阿伽陀薬』という薬の譬えが出てくるんです。(板書)ま、漢字で書いてあるのですけれど、ま、あえて仮名でわかりやすく書きました。『アカダ薬』というのは、印度の昔の最もすぐれた毒消し薬というふうなものでしょう。どんな毒でも、この薬を飲んだら、毒が消えるという、そういう薬だそうでございます。それで、(聖典二百三十六頁)

『おおよそ大信海を案ずれば、貴賤・縋素を簡ばず、男女・老少を誦わらず、造罪の多少を問わず、修行の久近を論ぜず、行にあらざる、善にあらざる……』とずうっと書いてありまして、その何行か後にですね、

『ただこれを不可思議・不可説・不可称の信樂なり。たとえは阿伽陀薬のよく一切の毒を滅するがごとし。如来の誓願の薬は、よく智愚の毒を滅するなり。』

ここにこう、愚の毒だけじゃなくて、智の毒というのがあります。智愚の毒という。私はここが読めませんでした。どうしてその智愚の毒と言われるのか。愚の毒ならわかる。常識では、それを智愚の毒を滅すると。なぜこんなことをおっしゃるのかなあと感じていました。それで、よくよく考えてみ

ますと、この智というのは、これはいわゆる仏智不思議の智ではなくて、人間のつまり自力の修行をすれば涅槃にいたれると、悟りをひらけるといふその自信を持って、修行をする、その心というものでしょう。自分が、本願を依りどころにしないで、一生懸命、精神の統一の修行をする。また学問もする。修行と学問とをしたら、必らずその悟りがひらける。釈尊と同じように悟りがひらけると思うておるその心。それが智だと私は思う。これは出世間的な意味でそうです。つまり仏教の、いわゆる聖道門のお坊さんたちが修行する心というふうなものでしょう。

それからもう一つ、世間的な面から考えますと、普通の私達の日常生活の上から考えますと、これは、人間の知性。知性によって自分と他人を分けて、自分以外の者は他人であると。自と他を分けて、そして自らを自分を良しとして、人は悪しとする。で、自と他を分けて自分を良いものとする。人を悪いものとする。それを言う(人間関係をうまく保つ為に)いけないから黙っておるけれども、そういう心はちゃんと腹の底に持つておる。それは、他を利用して自分が得をしようとする心です。あの人は頭の良い人だ、世渡り上手な人だ。というような言葉を普通よく聞きます。人の事を言うておるようだけど、知らず知らず自分が、そういう見方をちゃんとしておるんです。『撰大乘論』という無著菩薩の書かれた書物の中に、そういうことが書いてあります。自と他を分別すると。それが差別のもとだと。ということが書いてあります。それで、そういう心で賢そうな暮らしをしようと。これは毒だと。これもちょっと俗な話でなんですけれども、河豚は食いたし命は惜しし、という諺がございますね。何年か前に河豚の好きな芸能人が、幾皿も河豚を食べて亡くなったことがありました。で、私達は外から来た毒じやなくって、自らの内に毒を持つておる。これはみなさん御承知のとおり、三毒の煩惱というでしょ。貪、瞋、癡の三毒の煩惱ということ。自らの内に毒を持つておる。だけど毒を持つておるといふ事を知らずに暮らしておる。その毒、智愚の毒と、愚ということは、道理に暗いということです。愚癡ということですから。道理に暗い。教えていただいても教えていただいても、頭ではわかったような気がするのだけれども腹の底から納得してないという。例えば人は死んでも俺は死なぬぞというやつです。だから生死無常とい

う事を教えられておる、一息先の事はわからないということを教えられておるのだけれども、人は死んでも俺は死なぬぞという、そういうものは持つておるでしょう。

(一九八九△平成一▽・一一・二七、親鸞聖人讃仰講演会) つづく

今

今は今

すでに今

今、現在説法の今は今

於今十劫の今も今

塵点久遠も今深く

呼吸の間も今ひろし

.....

本願信ずる今は今

念仏申す今ここに

定聚の位、今すでに

大悲護念

大悲護念の夜は明けて

大悲護念の日はくれてゆく

人生畢竟、今は今

おおその今よ已に今

永遠の今

頑愚信無比(一)

松本 梶丸
(本誓寺住職)

題を「頑愚信無比」とさせていただきます。皆さま方は初めて聞かれた言葉であるかも知れませんが、またいままでお聞きになった方もいらっしゃるかも知れませんが、この言葉については最後の方でちょっと触れたいと思うんですけれども、たまたま縁あって、あるひとからこの言葉を知らされて、大変私は心を打たれたと言いますか、いい言葉だなあと感じましてこういう題を出したわけでありまして、この題にそってということではありません。あえてこれに副題をつければ、ご存知のように親鸞聖人が越後の流罪を通して「愚禿」と名告られていかれましたが、この「愚か」「愚禿」ということについて自分なりの感じていることを述べさせていただきますと思うわけがあります。

親鸞聖人が「愚禿」と名告られましたことにつきましては、多くの先生もおっしゃっていることでありますし、高倉会館での講演でも何人かの先生がおっしゃっておられることで、改めて私などが申すことはないわけです。ただ、越後の流罪を通して親鸞聖人は生涯、その「愚禿」という名前を外されなかったわけでありますけれども、そのことについて、いままでの解釈と言いますか、理解というものは、伝統的には存覚上人が書かれました『六要鈔』という「教行信証」の解説ですね、その『六要鈔』を通して『教行信証』を学んできた歴史があるわけです。『六要鈔』は「教行信証」の解説書として非常な権威があったんではなからうかと思えます。

ところがご存知のように最近、本山のほうから「相伝義書」という講義録、これは蓮如上人のお弟子方、またはお子さん方が「教行信証」をはじめ七祖のお聖教というものを講義されたものでありますけれども、その「相伝

義書」という書物が現在東本願寺から出版されております。その「相伝義書」というのは、読まれている方もあるかと思いますが、本質的には『六要鈔』批判というところに立っているわけですね。だから、読みますとかなり厳しい『六要鈔』に対する批判の言葉が出てきます。従って、親鸞聖人の御教えの受け止め方も、『六要鈔』とは相反するような、そういう所もあるわけです。まあ、どちらが正しいか間違っているかということは私などわかりませんけれども、ともかく少しづつ学ばせていただいておりますと、この「相伝義書」で説かれてあると言いますか、教えられている法が、親鸞聖人の本当の真意というものが述べられているような気がするわけがございます。そういうことから、この「愚か」「愚禿」ということに対しても、存覚上人の立場とこの「相伝義書」の受け止め方というものが違うわけですね。そういう所から少し入っていきたいと思います。

ご存知のように「六要鈔」では、「愚禿」ということについては、常に簡単にしか述べられてないわけです。どう書いてあるかと言うと、こういうふう

に解釈してあります。
「愚は蠢なり、智に對し、賢に對す、聖人の禿は智なり賢なり、實には愚蠢にあらず、今はこれ卑謙の言葉、禿は姓となすと稱す」と、これだけ書いてあるわけですね。

こういう所に存覚上人の立たれた立場というものがある意味で象徴されているように思います。存覚上人が書かれました『嘆徳文』という短かい、親鸞聖人を称えられたお聖教がございますが、これなんかを読ませていただきますと非常に親鸞聖人を称えられてありますが、ある意味で称えすぎと言いますか、誉めすぎと言いますか、そういうようなことを感じます。「愚はこれ蠢なり、智に對し賢に對す」、それは愚というものの解釈でありますけれども、その次に「聖人の徳は智なり賢なり、實には愚蠢にあらず」と、そういう形で、実は聖人の徳は愚でも蠢でもないんだと、これは単に卑謙の言葉なんだと、親鸞聖人が自らを謙遜して言われた言葉で、「禿は姓となす」と。こういう形で親鸞聖人が愚禿と名告られたことを、「智に對し、賢に對す」言葉だと言われながら、実際は聖人は愚蠢ではないんだと言うような形で存覚上人は言っておられるわけがあります。しかし、単に卑謙の言葉なら

ば、「愚」という言葉の内容は、浅いといえますか、単なる人間の分別からでた言葉になります。『相伝義書』ではそういう所をどういう風に受け止めるかと言います。「存覚の『嘆徳』のことば、ほむるに似たれども、祖意には不満足のことなるべし、もつとも、一応は卑謙の言なれども、実に深理を含みたまえるなり」(『愚禿鈔私考』)と、こういう形で批判しているわけですね。祖意というのは、つまり親鸞聖人のお心をはかると、大変不満足のことであるとおっしゃっているわけでございます。単に卑謙の言葉と言うような意味ではないんだと。おそらく『六要鈔』をとおしてこれを卑謙の言葉と、私たちはいただいていたと思います。ところが、この『相伝義書』なんかを読みますとですね、卑謙の言葉ということは一応否定はしていないんですけれども、卑謙の言葉について次のような解釈があるわけです。

二

この愚禿という名告りについて、『改邪鈔』とか『歎異抄』とかの一番最後の所に述べてございます。覚如上人は『改邪鈔』というお聖教のなかです。ね、「絆を専修念仏停廢のときの左遷の勅宣にせましまして、御位署には愚禿の字をのせらる。これすなわち、僧にあらざる俗にあらざる儀を表して、教信沙弥のごとくなるべし」(聖典680P)と、述べておられます。

ともかく、この愚禿という名告りは、念仏停廢の時の左遷を通して、越後の流罪を通して名告られたということは確かなようでございます。聖人は一生に五名を名告られるんでありますけれども、愚禿と言うのはこの左遷のちの名告りで、ご存知のようにこれは『化身土巻』の後序に出てきます。「僧に非ず、俗に非ず、このゆえに禿の字を以て姓とす」という言葉があります。これが愚禿という名告りなんですけれども、その言葉を存覚上人は卑謙の言葉であり、「禿は姓となす」という言葉でおっしゃってあるわけであります。ところが『相伝義書』を読みますと、そこにどう書いてあるかと言いますと、「然に卑謙といえども、通途の卑謙とは各別にして、甚深のご意趣あるなり」(『略本私考』)と。我われが一般的に使っている意味ではなくてそこに、甚深の意趣あるのだと。こういう風に相伝の言葉にはございます。単なる卑謙の言葉ではなく、そこには「甚深のご意趣があると」、実に深い含

んだ意味があるのだということを述べておられます。そしてこの「卑深のご意趣」とはどういうことなのか。「そのご意趣とは当流、安心の一義を顕わします御名なり」(『略本私考』)と書いてあります。

「愚か」ということは安心の一義を表わすみ名なんだと。これは私は大事なことだと思えますね。その次に、「卑謙といえども、常途の卑下することきに非ずとは、このことにして、己れが智を捨てて他に帰する趣なり。すなわち自力を捨てて他力に帰する旨趣なり」(『略本私考』) こういう言葉で「愚禿」という言葉を教えられてあるわけでございます。なんでもないことのようにですが、こういう言葉のおさえ方は確かなとらえ方だと思います。

存覚上人が単に、『六要鈔』で「愚禿」ということを卑謙の言葉と、それだけ言ってなんにも触れてないのに対して、『相伝義書』の中の『略本私考』という講義録のなかの一文でありますけれども、「愚禿」ということを「おのれが智を捨てて他に帰するおもむきなり。すなわち自力を捨てて他力に帰する旨趣なり」と。実に簡潔な言葉で明確に述べておるわけでございます。

「愚か」というのはもちろん、親鸞聖人の名告りでありますけれども、決して親鸞聖人自らが名告られたということではなく、本願の歴史と言いますか、真実の教えが伝承された歴史、よきひとの仰せをとおし、如来のまことに遇うたひとからの名告りであり、自分からおっしゃったわけではないということが大事だと思います。この「愚」ということはもちろん聖人が初めて言われた言葉ではなく、善導大師の「偈文」の中に、「我等愚痴身」という言葉があります。「我等愚痴の身」という言葉があります。そういうところにはやはり、浄土門の本意というのがあるのではないかと思います。さらに親鸞聖人のお師匠であります法然上人のお言葉には、皆さんもよくご存知でしょうけれども善導大師の言葉によせられて、「聖道門の修行は智慧を極めて生死を離れ、浄土門の修行は愚痴にかえりて極楽に生まる」という言葉があるわけでございますけれども、こういう所からみますと、親鸞聖人がご自身を愚禿と名告りなされたのは、いわば聖人の安心というを表明されてあるものであり、それは、また自力を捨てて他力に帰する旨趣というものを、その愚という言葉の中に述べられているそういう意味で「愚禿」、「愚か」という意味の中には実に大切な真理というものを含んでいるのではないかと思います。

す。

存覚上人はこの愚禿ということをも、「愚は蠢なり、智に對し賢に對す」という言葉でわざわざ説明されながら、そのところは「愚蠢にあらず」これは卑謙の言葉と言っているわけでありませうけれども、『相伝義書』のなかの『愚禿鈔思考』というお聖教の中でも、「愚はこれ蠢なり」と、やっぱり書いてあるわけですね。「智に對し賢に對す」と。「姓、闇昧にして是非を弁るることなし」と。なにが正しいか、なにが間違っているか、なにが非だなにが是だかわからないと言う、これを「愚」と言うとき、『愚禿鈔思考』の中では述べられているわけでございます。

三

そういうような所を『相伝義書』で、「愚禿」という言葉を、そのようにいただきますとですね、私たちは「愚禿」とか「愚か」とかいう言葉を簡単に言いますが、現実、親鸞聖人が、生涯外すことなく「愚禿」という名告りを生きていかれたということは実は容易ならぬことでありまして、あるいはこの真宗の教団においても、「愚」という、この身の普通の事実になんか無自覚なまま、そのときの目覚めをもつことなく生き、親鸞聖人を語り、時代を語り、社会を語るということになっていくのではないのでしょうか。

曾我先生は、この「愚禿」という言葉に對して、「愚に歸る」という講話のなかで愚ということをも「自然法爾」という言葉で言い換えておられるんですね。これは親鸞聖人が晩年に立たれた境地と言いましうか、世界であります。自然法爾が、愚に歸るということであると教えられておりますし、これをもう平たく言えば、「愚」ということは、「一文不知」ということなんだということを曾我先生はおっしゃっています。

しかし、一文不知ということもこれも決してなにも知らないという意味ではなく、そこには聖人が愚と言えども、自然法爾と言えども、一文不知と言えども、そこにはかならず弥陀の本願を仰ぐといひますか、よき人のおおせを仰ぐといひますか、仏様の智慧に照らされるとそういうことを通して開かれてくる、そういう所から自覚された世界が一文不知であると曾我先生はお

つしゃっているわけがあります。

ここで、話がちょっと飛躍しますが、私の好きな詩人のひとりに、八木重吉という詩人がいます。その詩人の詩に次のような詩があります。

この膝にたわむれる子よ

ひとつのあざやかな世界に住む

お前の眼は

この世界を浅はかだと

わたしにつげる

重吉の膝にたわむれるわが子の眼は、この人間の生きていく世界を浅はかだと、この私につげている、というのです。「童心は自然の象徴であり、他力の表顯である」と、高光大船師は言われますが、この子どもの眼こそ、仏さまの眼、一文不知の眼、つまり愚の眼ではないでしょうか。子どもは、自然法爾を生き、他力のままで生かされています。そのあざやかな世界に住む子どもの眼に呼びさまされたとき、重吉は、もちろん、自分を含めてこの人間の世界を浅はかだと悲嘆しているのではないのでしょうか。

つまり、「愚」ということはおよそすべての人間が、いかなる時代を生きようとも、およそ人間である限り、人間であることの普通のいのちの事実、そういう愚かさ、悲しみというものを身にさせていただきここに生きていく存在であるということでもあります。

曾我先生は、人間における、たったひとつの真実は、「我が身は現に罪惡生死の凡夫である、このことのみに人間におけるたったひとつの真実である」と、おっしゃいます。我が身に、その身の真実をおさえて、親鸞聖人の言葉に、「愚身が信心におきては、かくのごとし。」という言葉がありますね。身、存在そのものです。身と心の主体、まあ宿業の身ということをおっしゃいますけれども、そういう生きていくいのちの主体そのものというものを「愚か」という言葉で教えているのではないかと思ひます。

例えば我々は、人間というものは生まれてからこうして大きくなるまでいろいろな人に出会い、いろいろな言葉を覚え、知識を受け、教育を受けるにつれて、だんだん善し悪しとか是非を知っていく人間になります。しかし善し悪しや是非を知れば知るほど、逆に言えば本来のいのちというものが、そのこ

とによって覆いかくされて見えなくなってくると、たとえば、「執持鈔」(聖典44P)というお聖教の中に、「善悪の生所、わたくしのさだむるところにあらざるというなり」と。これ自力をすて他力に帰するすがたなり。」こういう言葉もごさいます。私たちは善し悪しの智慧を知ることによって、私たちの日常ということは善し悪しとか是非とか、そういう対立の世界で物事を見、そういう形で物を決めたり、ひとにレッテルを貼ったりして生きているわけであります。しかし、「執持鈔」では善悪、善し悪しというものが生まれてくる所は、決して私の定めた所ではないと、そうですね。私の定めた所であれば、善ということがわかれば善いということまででも実行できるわけであるし、悪いということを知れば悪いことをやめていくことが出来るわけです。

しかし、いくら善し悪しの智慧が身についても、存在そのものは、さるべき業縁のもよおせば、いかなる振るまいもすべき身、いずれの行もおよびがたき身、としての我われの身そのものは、そういう善悪の智慧を超えたところに完全しているわけです。そういう人間の自力というか、分別の間に合わない所に、人間のいのちというものは流れ続けているわけです。

それはいかに文化が発達しようと、教育が進もうと、人間の存在そのもの

五月・六月会館の集い

▼日曜講演(開会午前九時三〇分)

五月六日「仏になる賜命

——便同弥勒——

大谷大学教授 神戸 和磨

五月十三日「共に生きる」

大阪教区教化センター主幹 本多 恵

五月二十日「天上の月」輪

大谷大学教授 大屋 憲一

五月二十七日「自然の徳風」

大谷大学名誉教授 佐々木教悟

六月三日「未 定」

講師 未 定

▼同朋の会

五月十一日(金)午後六時三〇分

「唯信鈔文意」(第八回)

テキスト 真宗聖典

教学研究所員 西田 真因

「縁を頂いて

先日、自坊の春の永代経の法話の中で「私は父に大谷大学の二回生の時に死別したのですが、父の中途に参詣されたある老僧に「君が往生しなかったら、あなたの親父は成仏出来ないですよ」と云われました。その時は何んのことだか分

は、永劫、「愚か」という人間の分別の間に合わない、安田先生の言葉を読んだだけ、「ひとつの主観でもっては、いかんともすることのないいのちの主体として生きている。」であります。我々の日常は、人間の知恵というものを中心で生きていますから、必ずそこには自分の主観、こうしたい、ああしたい、こうなりたい、ああなりたい、善い悪い、是非と、そういうひとつの主観で生きているわけでありますけれども、いのちそのものは人間のひとつの主観でもってはいかんともすることの出来ない、そういういのちというものを只今としてあり続けているのが人間存在。それを「愚」という言葉は表顕しているのではないのでしょうか。

(一九九〇/平成二〇・三・四、日曜講演) つづく



からなかったんですが、今になって初めてそのことが分かってきました。」というお話を、五十代の講師の先生からお聞きしました。

その話をお聞きして、「私も父と死別して十年余りたつのですが、私はどうか？ 往生しておるのか？」ということに気がつきました。

丁度その頃に、高倉会館の館長にとの話がありました。私も還暦を迎え、人生の一つの区切りとして、新たな出発のご縁を戴いたの思いです。

「終わりを転じて初めとすれば、限りなく未来は明るい」という言葉に従い、

再び転じかえらされる道だと信じて、歩みだす所存でございます。

高倉会館は、歴史と伝統を伝えるものがあり、驚きと同時に、また、新たな感動を覚えております。本当に身のほど知らずによくも引き受けたものだと感じずにはおれません。

無能、懈怠の私を引き出して下さったご縁は、聞法の初心に返って精進せよとのご催促として戴き、長い伝統の流れの中で、微力を尽くさせて戴きたいと思うしだいです。

藤谷 秀誠

一九九〇(平成二)年五月一日発行
第三種郵便物認可

一部 〇円(送別)一年 一〇〇〇円(送共)
発行 真宗大谷派宗務所 細川 信元

編集 坂 高倉会館
電話 〇七五(三三三)

〒六〇〇
〇二〇七
振替 京都市下京区高倉通六条上ル
京都 一六〇八番